

---

# キメラな未来

椿山 昇

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

キメラな未来

### 【Zコード】

N1033E

### 【作者名】

椿山 昇

### 【あらすじ】

未来の世界そこでは人間と他の生物が合成された生物が当たり前のように存在する。未来では変わった社会問題が・・・そんなこんなのが学園生活？

キメラ、一対以上の親に由来し  
できた一つの個体  
体の各部に異なったものが混在する  
リンゴの木に  
ミカンができたり  
ジャガイモが根にでき  
葉にはトマトができる  
まあ味はどうだか・・  
そんな事を昔はやつていたらしい

だが、そんな事が出来るのだから  
いつかは人間にも羽が生えるかも知れない  
人間が水中で生活するのも  
夢じゃない

なんて昔は考えてただろう

現在ではそれが現実に存在してゐる

「おい、いつまで寝ているつもりだ  
もう七時だぞ」

「なんだよ、親父

まだ七時じゃないかもうチョイ寝かせてくれ  
つてか、上に乗つかつてくるな

「学校に遅刻するじゃないか

それに起こさないと父さんの飯がもらえない  
「うわっ、舐めるな  
氣色わりい

わかつた起きるから

「そうか、早く降りてこいよ」

そう言って四足歩行の親父が

ペット用の入口から出て行った

階段を降りると

母親が朝飯を機械と一緒に並べていた

「ああ、おはよう

犬ちゃん」

「なあ、俺もう高校生だぜ、ちゃんはやめようよ

それに機械が全部やつてくれるんだから

手伝わなくたっていいだろ」

「いいの、これは私の仕事なんだから」

西暦2200年

今からはだいぶ昔だけど

どこかのお偉いさんが

人間と動物との合成に成功した事を  
正式発表した

それは社会問題にもなり

世界中で大パニックになった

だが、だからと言って

それを処分するわけにもいかない

処分だなんてしたら人権問題にもつながる

なんて、ああだこうだ議論している内に  
キメラはどんどんと数を増やしていくた

原因は、一般人である

人間との結婚を嫌がり

人間以外の生き物と結婚したがる

人が増えていたからだ

どこかのお偉いさんは

その技術を世界中に売り飛ばし  
がつぽり稼いだらしい

だからその子孫は今でも働かずとも  
金には困らない

問題はここから

すでに收拾がつかなくなつていて

キメラ問題

キメラが成人になり社会にでても  
偏見があり純血の人間達は

ひどい扱いをしていた

だが、スポーツでは

世界記録を塗り替えるなど

ヒーローが誕生した

それをきっかけにキメラも

社会に入れるようになつてきていた

ただ、純血の人間には

居づらい世界にもなつてしまつた

どうも、長野 犬です

主人公です

けつして長野県ではありません

舞台はここ日本

ちなみに今の総理大臣は猿がやつております

ああ、キメラだからね

母親は純血の人間

父親はなんと犬

柴犬です

そしてその両親から生まれたのが

俺、<sup>ケシ</sup>犬です

日本の人口の約九割以上はキメラになっています  
だから、うちの母親は相当珍しい  
でも母型の祖父祖母も純血だから  
俺にとつてはそんなに珍しくもないけどね  
ただ、父型の方は・・会った事がありません  
親父は元野良だから両親がどこで何やつてるだかなんて  
知る訳がありません

そんな両親の出会いは

父親が道端に倒れてるのを

母親が拾ってきたのがきっかけだそうです

俺の形は<sup>ナリ</sup>

犬と人間だから相當なものと思うかもしけないが  
母親の血が強かつたらしく  
ほとんど人間と変わりません  
髪の色が真っ白なだけ  
それで色々といじめにもあつたけど・・

「おい母さんご飯」

なんて、親父が言つてるんだが

「犬ちゃん、お父さんなんて言つてるの？」

俺は犬と人間の子供だから

犬の言葉がわかる

「今日もきれいだねだってぞ」

「あら～そんな事言つてくれてるの

うれしい～」

「や、やめろ

抱きつくな、あつぐるしぃ

ん? 何かくわこわーーーク臭い

純血の母親には

親父の声はワンワンとしか聞こえない

俺が子供の頃

親父が母親に不満を言つてゐる時に

俺がそれを母親に伝えると

「お父さんがそんな事言つ訳ないでしょ

なんていつもは穏やかな母親が

尋常じやないくらいヒステリックになり

それがトラウマで何となく

本当の事を今でも伝えづらい

さてと、そんな事を

話しているともうこんな時間だ  
そろそろ出発しないと

新学期早々、遅刻してしまう

「それじゃあ、行つてくるから

「ああお弁当は?」

「いらないよ

午前で終わるから

ああでも集まりあるから遅くなる

「犬、帰つてきたら

父さんと散歩だぞ

「はいよ～」

外に出ると

いつもと変わらない町並み

車は磁力によつて浮いてるし

壁には色々な宣伝の映像が飛び交つてゐる

さてと、早く学校に向かわなくては

さつきも言つたが

親父は犬だ

脚には結構自信がある

100mだつてこの前五秒切つたしな

頑張れば車より早く走れる

まあそんなに頑張らないけど

「おい、奇人そんなんじや遅刻するぞ」

声のほうを向くと

バスにゴリラが乗つてる

俺は今バスと並走して走つてる

「はあ、またお前が珍獸」

「珍獸だと俺のどこが珍獸だ」

「誰がどう見たつて珍獸だよ

いやまつたく

よくゴリラと結婚しようだなんて思つたよな

「てめえ、ゆるさねえ」

そう言つて走行中にもかかわらず

ゴリラがバスから飛び降りた

「やべつ・・」

俺は屋根の上にジャンプし

学校へ急いだ

ゴリラは電柱を使い

屋根に上がり俺を追いかけてきた

「意外と脚早いな珍獣」

なんて馬鹿にしていると

俺は高層マンションの屋上に追い込まれてしまつた

「死ね、奇人」

だなんて、襲いかかつて来たけど

俺はマンションから飛び降りた

すると、上から羽を生やした人が  
俺に向かつて降りてきた

俺はそいつの手を取つた

「いや」ナイスだ タカ

これでゴリは遅刻決定

屋上では悔しがつてているのか

ゴリラがそこら辺にある

物を投げ飛ばしていった

「つたく、俺がいなかつたら  
どうするつもりだつたんだか」

羽を生やした人

こいつの名前はタカ

まあ親友つてやつ？

「はあ、こんなことして

ゴリと同じクラスだつたらどうしよう

「あれ？知らないのか？  
あいつ留年だぜ」

「まじで？馬鹿じやないの？」

「まあ学校に来てもろくに授業に出ない  
お前には言われたくないと思うぞ」

「それもそうだな」

「おい、着地するぞ」

「OK~」

「おお、同じクラスじゃん」

「一年間よろしく」

「げ・・担任キングじゃん最悪だよ」

「キングに狙われるんじゃない?」

「去年も色々と問題あこしたし」

「キングに目を付けられるような事をした覚えはない」

「でも、他の先生にはしただろ  
広まるんだよそう言つのはきつと」

「タカ、俺今日は休みつてことで」

「そう言つて帰るうつとすると

誰かに首元を掴まれた

「誰が休みだつて?犬」

「ど、どうも先生一年よろしく・・」

立派な<sup>たてがみ</sup>蠶<sup>てんねん</sup>を生やしたライオン先生

百獣の王だからあだ名がキング

細川とか似合わない名前してるけど

「俺が担任になつたからには

ビシバシいくからな

ほり、早く教室に行けHRが始まるぞ」「はーい

「と訳すで担任の細川だ

よろしく

教科書などは、学校内でだったら

ダウンロードできるから

各自、今日中にノートで「ダウンロードしてお好みの「

こんな薄っぺらい板の

どこにダウンロード機能が付いてるのか

毎回疑問に思う

「それから、転校生を紹介する  
はい、入つてこい」

すると、扉が開き

入ってきたのは女性だった

「まじかよ・・

「信じられない」

クラスがざわめき始めた

「おい、犬

あいつまさか・・

猿つてことは考えられないか?」

俺は鼻で匂いをかぎ

「いいや、タカ

間違いない 純血者だ」

純血者

昔はキメラが社会から迫害を受てる同様

今では立場が逆転

キメラが純血者を迫害するようになっていた

そんな感じでHRも終わり

放課後、生徒たちもいなくなつた  
空いてる教室にて

「まあ、そつは言つても

### 俺の母親

純血者だしどうでもいいんだけど  
確かに、俺の父親も純血者だしな  
「転校してきた理由なんだと思つ?」  
「家庭の事情とか言つてるけど

前の学校で色々とあつたんだろ  
高校で転校は珍しいから

「俺等と同じか・・

「そつだな、こんな形<sup>なり</sup>だし」

俺達のように

純血者じやないがキメラにもなりきれてない  
奴の事を奇人と呼び

純血者同様、迫害の対象になる

「タ力はいい方だろ

翼生えてるんだから

「ああ、それ言つちやう?

それ言つちやうんだ

・・あれ?

「どうした?」

「あれ、転校生じやね?」

この高校はコの字になつていて  
教室の向かい側には

職員室や化学実験室などが見える

その建物の屋上に転校生が立つていた

「何やつてるんだ? あんな所で  
「おつ、あの子、白だ」  
「お、そんな事言つてる場合か  
「いや、頼むから

俺達が考へてる行動だけはしないでくれ

残念ながら

予想してた通りになつた

屋上から飛び降りた

「あの、馬鹿野郎」

そう言つて俺は3階の窓から飛び出した

空中で転校生を捕まえ

そのまま窓ガラスに突っ込んでいった

「この、ば・・・」

続きを言おうとしたが

俺にしがみつきながら

泣きじやぐる転校生にとても言えなかつた

「犬、大丈夫か？」

「ああ、何とか」

「とにかく、ここはヤバい

先生が来ちゃうよ」

「ああ、逃げよう」

転校生を抱えたまま

割れた窓から飛びおりた

ちなみに何度も言つようだけどこの3階

そんなこんなで

学校の近くの公園

転校生も泣き止み

ようやく本題へ

「なんで、あんなことをしたんだ」

「・・・」

「いや、まあ気持はわからないでもない  
ああ・・でもわからないかな?」

「わからないだなんて

当たり前よ・・

「え?」

「キメラに純血者の気持ちだなんて  
わかる訳ないでしょーー!」

「そうだな」

「そうよ、口出しあいで  
「でもな、俺達のよつに  
キメラにも純血にもなれない  
気持はわかるのかー!?  
どちらからも迫害される  
奴の気持ちがわかるのかよーー!」

「・・・」

「それと同じことだ

自殺するのに言い訳してんじゃねーよ

「・・・ごめんなさい」

「よし、許してやろう転校生  
ちなみに名前は?

人の名前覚えるのが苦手なんだよ」

「・・倉田 藍」

「よろしく、倉田

俺は犬

なんかそこで翼の手入れしてるのはタカだ

「よろしく

「それで、これから集会があるんだが

倉田も来い

みんな歓迎してくれる

「集会?」

「来ればわかる」

街中なのに入通りが

まつたくないところに倉田は案内された  
細い路地を進んでいき

だんだん不安になつてきた

「もうちょいだ

さあ着いたぞ」

細い路地を抜けると

広い空間があり

そこには一部蛇の鱗で覆われた子供や  
頭に猫耳がある女性

そのほかにもキメラに完全にはなりきれていない  
人達がたくさんいた

みんながそこで笑つたり楽しんだりしている

「ここは・・?」

「奇人ハウスさ

「奇人ハウス?」

「そう、純血にもキメラにもなりきれない  
奴等がここに集まるのさ

ああ・・だからと言って

純血やキメラを迫害したりしない

ほとんどの奴が親かその上の代が純血者だし  
キメラだつている

どうだ?

これを見てもまだ自殺しようだなんて

考えてないだろうな?」

「いいえ、そんな事ないわ

「そりやよかつた  
ようこそ、奇人ハウスへ  
歓迎するよ」

(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございました。  
連載をほつたらかして  
こんな物を書いてみました  
感想や意見ありましたら是非書いてください

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1033e/>

---

キメラな未来

2011年1月12日03時20分発行